

2000年5月

## 目次

特集 王昶雄先生追悼論文集

[藤井省三「さらば『永遠の文学青年』」](#)

[河原功「作家王昶雄先生との別離」](#)

[垂水千恵「追悼・王昶雄氏」](#)

学会・シンポジウム参加記

澤井律之「[第2回日台シンポジウム『近代の日本と台湾』」](#)

圖左篤樹「[台湾の土地制度と農業・環境問題学術シンポジウム参加記](#)」

台湾における台湾研究通信 (3)

宮畑加奈子「[『台湾法律史学会』の創立とその軌跡](#)」

許佩賢「[台湾教育史研究会簡介](#)」

[台湾学会・シンポジウム消息](#)

[台湾図書館・档案館消息](#)

[学会活動報告](#)

[編集後記](#)

[台湾大地震被災家族を持つ台湾人留学生支援のための募金のお願い](#)

## 特集 王昶雄先生追悼文集

2000年元旦、王昶雄氏が亡くなった。王氏は「奔流」の作者として知られ、台湾文学史に大きな位置を占めている。日本人研究者との交流も盛んであった。

編集部では、王氏の冥福を御祈りするとともに、ある意味で王氏とともにあった台湾文学史を振り返る意味で、追悼論文集を企画した。

### さらば「永遠の文学青年」

藤井省三

正月に台北から悲しい報せが届いた。1月1日に作家の王昶雄（ワン・チャンシオン、おうしょうゆう、1916～）氏が亡くなったのだ。王氏は淡水の人で日本植民地時代の公学校で学んだ後、32年日本に留学、東京・郁文館中学を卒業後いったん日大文学部に入学したがまもなく歯学科に転学し、42年に卒業すると淡水に帰って歯科医院を開くかわら、日本語文芸活動を始めた。東京時代には新劇運動にも参加したことがあり、40年2月には台北の邦字紙『台湾日日新報』に「歌舞伎と支那劇の研究」という古典芸能の比較論を連載してもいる。当時の台湾では日本語の急速な普及と台湾の経済発展に伴い日本語読書市場が拡大し、台湾文壇が成立しつつあった。王氏のデビュー作「奔流」は『台湾文学』第9号（43年7月）に発表された小説で、戦時下の皇民化運動の中で台湾人青年が台湾アイデンティティに目覚めていく物語である。戦後は旧国民党独裁下で日本語の刊行物が禁止されたため、北京語を学び直して文筆活動を続けていた。私も晩年の王氏に台北で幾度かお会いしたことがある。「永遠の文学青年」のような王氏が、東京・歌舞伎座でのデートや『台湾文学』創刊当時の思い出などを巧みなユーモアを交えて歯切れのいい東京弁で語っておられたようですが、今でも目に浮かぶようだ。なお王氏の代表作「奔流」は河原功ほか編『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集』第五巻「諸家合集」（緑蔭書房）および黒川創編『＜外地＞の日本語文学選1』（新宿書房）に収められている。

（『北海道新聞』2000年2月4日原載。著者の同意に基づき転載いたしました/編集者注）

### 作家王昶雄先生との別離

河原 功

穏やかな新年を迎え、電話のまったく掛かってこないところに、1月2日夕刻、突然電話のベルが鳴った。台湾の王凌洋さん（王昶雄氏のご子息）からで、王昶雄氏が1月1日午前1時53分に亡くなられたという連絡であった。予期はしていたが、ショックだった。お悔やみを申し上げると、王凌洋さんは、「でも、2000年に入って良かったです。河原先生が来てくれたおかげです」という話であった。私は年末に、王昶雄氏のお見舞いを主たる目的として、妻と娘を伴って渡台したのだった。台北に着いた12月22日の夕刻、私たちはすぐに王先生のお宅を訪問した。11月に入ってから、訪台を心待ちにしている旨の手紙を二通、更に深夜に2度ほど国際電話を王先生から直接受け

ていたからだ。

夏に1ヶ月、私が台湾に滞在していた時、王先生は食欲不振で栄養剤の点滴を受けられた日もあり、体調はあまり良くなかった。それでも、8月10日には新竹の江惟明さん（江肖梅氏のご子息）宅まで列車でご一緒したこともあり、差し迫った状態とは思えなかった。秋になって、知人から王先生の具合があまり良くないことを伝えられたこと、先生から頂いた電話でも「もう駄目です」と弱音も述べられただけに、今回の渡台では先生の病状が一番の心配事であった。

お宅に伺うと、王先生は2階の書斎兼寝室のベッドに寝付いており、付き添いの女性が先生の足のマッサージをしていた。頭部近くの壁際には酸素ボンベが立てかけてあった。ベッドの上には何冊もの本が置かれてあり、読書欲のいまだ旺盛なことが一見して見てとれた。以前と比べると、声に張りがなく、身体も痩せ細ってはいたが、先生の意識はしっかりしており、私たちの訪問を心待ちにされていたことが笑顔にはっきり浮かびあがっていた。王先生は私たちに、「こんな状態になって申し訳ない」とか、「元気だったら淡水を案内するのに」とか、「送ってもらった本は面白かった」とも、いろいろと話をされるのだった。茶菓子を頂きながら、約1時間ほど寝室にお邪魔していたと思う。容態の良くないことは一見して判断できたので、もう訪問することは遠慮しようと思っていたのだが、先生及びご家族の強い勧めがあつて、24日に再度訪問することを約束してこの日はおいとしました。冬の台湾にしても異常に寒く、外の気温は摂氏4度という日であった。

24日の午後6時前、私たちは王先生のお宅を再訪した。この日は日中に、私は妻と娘を初めての淡水に案内した。気温は相変わらず上がらず、淡水溪を伝って来る寒風に震え上がるほどだった。しかし、真理大学と台湾文学資料館、淡水中学校、紅毛城、更に龍山寺と周辺の市場等を巡り、林玉珠さん（王昶雄氏の奥様）が描く絵の世界と同じ場面もあつて、娘は驚きと感激を味わっていた。この夜の話は淡水のことに始まり、歯科医として活躍されていた当時のこと、王先生の人柄など、話は盛り上がるいっぽうで、先生ご自身までが苦笑されるなど、お喜びであった。

食事ということになり、心至れりの家庭料理がたくさん用意されていた。奥様ご自慢の「春雨炒め」はいつもながらの絶品だった。この席に、なんと王先生もお座りになったのであった。先生は2階から息子さんに抱きかかえられて降りてきて、奥様、息子さん夫婦、お孫さんたちと、実に賑やかな晩餐となった。具合が悪くなって以来、1階の食卓で食事をとるのは初めてのことで、それでも先生は「春雨炒め」や温野菜をずいぶん召し上がった。私たちはビールを飲みながら歓談し、数々の手料理に箸をつけていった。そうした雰囲気先生はとても喜んでおられ、その様子を見ているご家族の皆さんにしても心が癒されているように感じられた。私たちは9時過ぎまでお宅にお邪魔したことになるが、私たちをホテルまで送ってくださった息子さんから、車の中で「久しぶりに楽しい食事をすることができました。父も喜んでいました」と感謝されるほどであった。

食事は長く続いたが、先生は一足先に2階の書斎兼寝室に、やはり息子さんに抱かかえられて戻った。しばらくして、付き添いの女性からの伝言ということで、私は先生のもとに呼ばれた。「河原先生に形見としてぜひ本を貰ってほしい」という用件だった。そういえば、渡台2週間前ごろの電話で、先生は私に「河原先生に渡したい本がある」と話されたのを思い出した。

先生の書斎兼寝室の書棚には、きちんと整理された多数の本が並んでいたが、見渡したところ、台湾関係で私が頂戴しようと思う本はなかった。だいたい我が家の書庫にあるものだったからである。それでも先生の強い意向に従って、私はふと目に入った楊達の著作3冊（楊達が王昶雄先生の陽明山の別荘に宿泊した時の記念）を頂くことにした。また、書棚のガラスに黄ばんだ妙な紙片が挟まっているのが目に入った。広げて見ると、先生の郁文館中学卒業年度の通知表だった。恐る恐る尋ねると、「持って行ってください。さすが目が高いですね」と、先生はおっしゃった。これこそ「形見」にふさわしいと思った私は、喜んで先生の「通知表」を頂戴することにした。

この瞬間、私は王先生の死を強く感じた。今夜を最後に、先生との永遠の別れになると覚悟せざるを得なかった。でも、先生の協力のもと、『王昶雄作品集』を今年中には日本で出そうと計画していたので、先生にはなんとしても長生きしてほしいという気持ちが一方で強く働いていた。先生の書かれた作品のうち、代表作「奔流」は広く知れ渡っているものの、私自身がまだ読んだことのない「淡水河の漣」「鏡」「梨園の秋」の3作の消息を知りたかったが、そのことを口にすることはなぜか躊躇された。1階での笑い声が2階にまで聞こえてくるが、私は寂しいものを感じていた。

王昶雄先生とのお付き合いは、ここ10年ほどに過ぎない。30年来の友人黄天横氏に初めて王先生ご夫妻を紹介された時、先生は「河原先生のことはずっと前から知っていました。いつか会える日が来るものと思っていましたが、会ってみて、これまでの会わなかった期間が一挙に縮まりました」と話されたことを、今でも昨日のことのようによく覚えている。私も、王昶雄先生とは運命的な親交となることを予感していた。まさにそのとおりで、その後の付き合いは深く、年齢は離れているが旧知の友といった感じであった。

私はこれまで、台湾文学研究を進めていくなかで、多くの台湾人文学者と交友を結んできた。今はなき楊達、張文環、吳濁流、王詩琅、葉榮鐘、劉榮宗、吳建堂、廖漢臣、黃得時、陳秀喜の各氏のことを時おり思い出すが、今回の王昶雄先生の死去に対してはとりわけ寂しいものを感じている。けれども、亡くなられる1週間前にお会いできたこと、しかもゆっくりお話を交わすことができたことを私は幸運に思っている。

私たちは26日に台湾を離れたが、その翌朝に先生は病院に入院された。王先生は、まさに私たちとの最後の別れをするために命を繋いでくれたと思えてならない。

王昶雄先生の作家としての評価は、今のところ小説「奔流」一作でしかなされていない。王昶雄研究も十分とは言えない。「奔流」に加えて、「淡水河の漣」「鏡」「梨園の秋」の3作をも収めた『王昶雄作品集』発刊をなんとか実現させることが、私のこれからの務めだと思っている。奥様や息子さんと連携して、その仕事に早く着手したいものだ。

思いは尽きないが、王昶雄先生のご冥福をお祈り申し上げることでひとまず筆を置きたい。あわせて、ご遺族のお心が早くに安泰されることを祈念してやまない。

合掌

## 追悼・王昶雄氏

垂水千恵

1941年5月創刊の文芸誌『台湾文学』の有力な同人の一人であった王昶雄氏が、2000年1月1日にご逝去なされた。享年85歳、1月28日に行われた葬儀には、巫永福氏をはじめとする多くの台湾文学者が参列したが、日本からも長年の友人でいらした塚本照和先生が駆けつけ弔辞を読まれた他、下村作次郎先生、黄英哲先生のお姿もお見受けした。葬儀では王氏作詞・呂泉生作曲の名曲「阮若打開心內的門窗」が何度も歌われ、哀しみのなかにも清々しさの漂う会であった。

台北の中山市場近くの王氏のお宅は、台湾文学関係者にとっては訪台の折には必ず訪れる場所の一つであったから、「王さん」の逝去を嘆

く方は多いことと思う。その中では若輩に属する私が追悼文を書いていいのかわからないが、たまたま去年の10月からこの3月まで交流協会の日台交流センター歴史研究者派遣事業のプログラムで台湾滞在中であり、亡くなる直前の王氏の様子、或はその前後の台湾の雰囲気等を多少は見聞きしているので、そうした報告も交えながら書くことにする。

まずは、台湾文学研究者以外の方々のために、簡単に王昶雄氏のプロフィールを紹介しておこう。王昶雄、本名栄生氏は1915年淡水に生まれる。淡水公学校卒業後、1923年には東京の郁文館中学に入学、29年に日大文学科に入った後、36年にもう一度日大歯学部に入り直している。下村先生も著書の中で王昶雄氏の日本語の上手さは母語の域に達していると評していらしたと記憶しているが、誰もが感心する王氏の日本語力はこの長期にわたる日本滞在と無関係ではないだろう。

日大在学中から同人誌による文学活動を始めるが、1938年、詩「陋巷札記」を、39年には小説「淡水河の漣」を『台湾新民報』に発表したとされる。1942年に帰台以降は『台湾文学』の同人となり、翌43年に小説「奔流」を『台湾文学』3巻3号に発表、この一作によって長く台湾文学史上に名を留めることになった。

簡単に代表作「奔流」の内容を紹介しておこう。主人公の「私」は日本帰りの医者である。「私」は或る時、患者としてやってきた中学の国語教師伊東春生という34、5歳の人物と知り合い、友人になる。伊東は「本島人」であるが、日本人の妻とその母と暮らしており、決して「本島語」を使おうとしない。最初「私」は日本留学時代に日本人の恋人がいたが、台湾での結婚に自信が持てず、別れた過去があるだけに、日本人との結婚に踏み切り、「内地に於けるあのゆとりのある気持や生活を」「そのまゝそつくり、郷里へ持ち運んだ」伊東を「千両役者」として感心して見ていた。しかし、台湾人の実母に対する数々の冷たい仕打ちを見てから、伊東の生き方に疑問を持つようになる。その一方で「私」は伊東の甥の林柏年の純粋さに惹かれていく。柏年は台湾人の実母を省みない伊東を激しく批判する一方、「大いなる大和魂に繋がるために」日本へ赴き武道専門学校に入る。しかし、伊東のように台湾を否定することなく「立派な日本人であればある程、立派な台湾人であらねばならない」と言う決意を「私」に書き送るのである。

こうした二人の人物の間で揺れ動く「私」の気持が、淡水の自然を背景として描かれた「奔流」は、やはり長く記憶されるに足る作品と言える。幸いなことに新宿書房から出版された『<外地>の日本語文学選1』（黒川創編）、あるいは緑蔭書房から出版された『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集・第五巻・諸家合集』（河原功他編）に収録されて、入手しやすくなったので、どうか未読の方は一度読んでいただきたい。

上記の短い内容紹介からも、「奔流」が皇民化運動を背景として書かれた作品であることはすぐに見て取れると思う。実際、「奔流」が「皇民文学」であるかどうかをめぐって、かつて議論されてきたし、ここ二年ほど断続的に続いている新？皇民文学論争の中で、今なお喧しい議論があることは事実である。ただ、その議論の過程について、正直な話、今はとても語る気にはなれない。一つにはこれが追悼文という性格の文章であることもあるが、ここ数日の李登輝辞任要求をめぐる抗議運動に象徴されるような荒くれだった雰囲気の中で皇民文学を語ることは、あまりに生々しすぎるからである。

9月の地震と3月の選挙に挟まれたこの半年の滞在は、私にとって対立と死に彩られた時間であった。それを「政治」の文脈ではなく、「文学」の文脈で語れるまで自分の中で消化するには、まだまだ長い時間が必要であろうと思う。最初に「奔流」論を書いた1992年当時とは、いろいろなことが違ってしまった。違ってしまったことの一つには、王さんの癌の再発、闘病、死去も含まれている。たった半年の滞在のうちに、11月14日の龍瑛宗氏の葬儀に引き続き、王さんの葬儀にまで出ることになるとは、出発前には全く予想もしなかった。

王さんのご自慢は健脚と白髪のないふさふさとした黒髪で、1996年に胃を切ってから若干食は細くなったものの、ずっと最後の最後までお元気だった。1998年の夏に訪れた時は、記録的な暑さにもかかわらず、張恒豪氏といっしょに「奔流」の舞台となった淡水を案内してくださった。去年の5月にも日本を旅行、私が10月に来台して、いつものように「報名」に訪れた時も、春には桜を見に行こうなどと話していたばかりだった。ただ、いつもなら持参した王さん好物の羊羹をその場で開けて召し上がるのが、食欲がない、とおっしゃっていたのが兆候と言えは兆候だったのだろう。

11月11日に、また張恒豪さんと三人で淡水に行こうかと約束していたところ、確かその1・2日前にキャンセルの電話がかかり、その時は声まで変わっていて、さすがに鈍感な私も異変を悟った。お見舞いの帰り、ご長男の凌洋氏から癌が再発して医者は後2・3ヶ月と言っていること、告知を迷っていらっしやることを伺った。しかし、14日の龍氏のご葬儀の時には、葬儀開始前にお一人で弔問にいらっしやり、ゆっくりながらしっかりと歩いていらしたので、先日の凌洋氏のお話は嘘ではないかと思ったほどである。その後も、新聞で見た\*\*の新刊書が欲しいとか、再々電話がかかってきて、その衰えない知識欲にきっと医者の誤診だろう、と高を括っていた。結局12月20日にお会いしたのが最後となったが、その時まで、日本語と台湾語をきちんと使い分けて話されており、一切の誤用がなかった。

ただ、その誤用について、一つだけ悲しい話を書いておく。「奔流」の内容そのままに、ずっと日本と台湾の両地を愛し続けた王さんだが、一度だけ日本人研究者に対する不満をこぼされたことがある。詳しいことは忘れたが、ある研究者が学生を連れて王さんを訪問した時、日本語で話されていた王さんが、何か台湾人に多く見られる誤用表現—発音に関する誤用だったろうか、具体的には覚えていない—をしたらしい。その時、その日本人研究者が学生の前で「ほらね」という感じで指摘したのだと言う。そのことに対して、自分は生きた人間であって、戦前の台湾人の標本じゃない、というような主旨のことを洩らされたことを記憶している。

ここで敢えてそのことを書くのは、決してその研究者の不用意な一言を責めるためではなく—私だって同じようなことをどこかでしているかも知れない—、あの豪快、闊達な王さんの悲しみの一つを記録するためである。私は基本的には作家には会わない主義の人間だが、それでも何かの縁で知り合い、会ってしまうこともある。特に戦前の台湾文学の場合、基礎研究が欠けていることがあり、どうしても本人、あるいは家族と接触せざるを得ない時もある。しかし、人に会う、特に老人に会うということは、重いことだと思う。先輩達には、今ごろ何を言ってるの、と笑われるかもしれないが、もっと若い人のために反省を込めてこのエピソードを書いておきたい。

総統選を終えて、台湾は大きく変わろうとしている。この「奔流」の中で台湾文学はどういう方向に進むのであろうか。2000年はちょっとばかり覗きながらも、総統選まで見届けることのできなかった王さんに代わって、この奔流の行方を見つづけることで、長年の恩義に報いたいと思う。そして、生前は間に合わなかった台北県立文化中心の企画による王昶雄全集の出版、今年の11月に予定されている真理大学台湾文学系主催の王昶雄文学研討会の成果を心待ちにしたいと思う。

王昶雄さん、安らかに眠りください。

(2000年3月22日脱稿、於台北四維路)

## 学会・シンポジウム参加記

### 第2回日台シンポジウム

#### 「近代の日本と台湾」

澤井律之

昨年末12月3日、4日の両日、日本社会文学会（代表・西田勝）主催、交流協会後援による日台シンポジウム「近代の日本と台湾」が法政大学で開催された。98年12月、台湾大学法学院（院長・許介麟）との共催により同法学院で第1回が開催されたのをうけ、今回が2度目である。本シンポジウムは、専門の研究者から評論家、教育関係者、在野の文学や歴史、思想愛好家など広範な人々が参加し、その広範な人々を視野に入れた柔軟な企画・運営がなされるようで、参加者は多く、今回も100人前後が参加していたと思われる。

今回は、台北という場所で「皇民文学」がテーマに据えられ、思想的に立場を異にし、相対立する意見をもつ台湾の学者や評論家が同席して壇上からもフロアからも激しい議論を交わしたので、会場には異様な緊張感が漂っていた。それに比べて今回は、全体的に会場は静かで、「エキサイトした感じ」（河原功「学会・シンポジウム参加記」『日本台湾学会ニュースレター』第2号）はなく、よく言えば協調的な雰囲気の中で行われた。

今回は、3日が文学と歴史・思想の分科会に別れ、4日が合同シンポジウムの形式で行われた。筆者は、3日の文学分科会と4日のシンポジウムに出席したのでそのあらましを紹介しておく。

3日の文学分科会では陳培豊、板谷栄城、三木直大、丸川哲史の4氏の研究発表が行われた。

陳培豊論文は、陳火泉の「道」を当時の日本の同化政策とからめて論じたところに新しさがある。「道」は皇民文学か抵抗文学か議論の分かれるところであるが、陳培豊は「道」が昭和期に「再構築された新たな「同化」論理を的確に説明し」、それゆえ総督府に高く評価されたという側面を論証した。コメンテーター河原功は、同化の捉え方は一様ではないこと、「道」の主人公における改姓名に対する歯切れのわるさ等を指摘し、まだまだ議論の余地が残ると述べた。

板谷栄城は、宮沢賢治の研究者で、これまで台湾文学とは無縁であったが、氏は盛岡在住であったことから戦前盛岡女子師範学校で教師をしていた台湾人作家王白淵の事跡をたまたま発掘した。氏の発表は、王白淵の事跡をいかにして発掘したかの説明に終始したが、それはそれで盛岡におけるある日台交流の美しい逸話を聞くようで感動的であった。コメンテーター野間信幸は、氏の発表を補完し、研究としての意味を正確に位置づけた。

三木直大論文は、日本語から中国語への言語転換を体験した「二つの言語を跨ぐ世代」の詩人林亨泰を論じた。母語ではない言葉で詩作することの意味を三木論文は深く問うている。コメンテーター下村作次郎は、台湾文学研究の分野で日本ではまだ台湾現代詩の本格的な研究がないこと、小説家における言語転換については語られてきたが、詩人については十分な考察がないことから、三木直大の研究が先駆的な仕事として注目されると述べた。

丸川哲史論文は、戦後直後二・二八事件や台湾人のアイデンティティを描いた秀作を発表したが、後に商売人、投資家へと転身した邱永漢をサイドの論などを援用しディアスポラの観点から位置づけ、より肯定的にとらえなおそうとする。コメンテーター川村湊は、丸川論文を認めつつ、そこからより突っ込んだ考察が見たいと述べ、何ものをも代表しえない邱永漢、何ものをも中国をも代表してしまう陳舜臣、在日朝鮮人作家金石範等を引き合いに出し、在日台湾人や韓国人の文学の研究の必要性を提起した。

4日は、台湾側、黄英哲、日本側、西田勝を座長に、許介麟、鄭清文、林水福、張良澤、大江志乃夫、山田博光、藤井省三、鈴木佑司をパネリストにむかえ、各パネリストが論題にあるような報告を順次行う形でシンポジウムが進められた。個々の報告はそれぞれ興味深く、またシンポジウムの合間にかつて従軍慰安婦になるよう強制された台湾人女性二人が壇上に上り証言を行う機会も設けられ、主催者の意図と見識は十二分に理解された。ただ残念ながら、報告相互の関連性を見出しがたく、ある問題意識を共有するまでには至らなかったように思う。シンポジウムの全容を紹介することはできないが、一つだけ気になった点を述べておきたい。

林水福は、中島利郎、河原功編『日本統治期台湾文学 日本人作家集』（緑蔭書房、1998年）について、西川満等日本人さえも台湾文学に含めていることに異を唱えた。理由は簡単で、「西川満が日本人であり、異国人であるからだ」。林水福は、台湾文学の定義は難しく「しばらくは共通の認識がうまれることはないだろうし、とりあえず気にしなくてよい問題」と述べながらも、日本人の文学を台湾文学に含めないという点だけははっきりと認めている。戦前台湾の文学は、日本文学と日本文学を通して世界文学の影響を受け、形成され発展した。日本人と台湾人の対立もあったが、台湾の文壇は基本的に日本人と台湾人の協力のもとに成り立っており、戦前の台湾地域での文学に日本と台湾の境界を引くことはできないのではないだろうか。パネラーの一人の鄭清文は、やはり台湾文学とは何かという問題について発言しているが、台湾文学の特質は「郷土意識がポイント」だとし、日本人の作家、佐藤春夫、西川満、庄司総一、鈴木明等も台湾を描いたとして評価している。日本人の文学を台湾文学に含めるかどうかはいつでもよいことだが、民族決定論の無批判な持ち込みは、台湾文学研究にとって決してプラスに作用しないであろう。

なお、本シンポジウムは、西田勝代表によると5回まで開催されるそうだが、第3回は林水福輔仁大学教授が引き受けられた。

○研究発表

《文学》

陳培豊（東京大学博士課程）

「『道』に映された『同化』と統治の原理」

コメンテーター 河原功（成蹊高校教諭）

板谷栄城（宮沢賢治研究者）

「王白淵の研究について」

メンテーター 野間信幸（東洋大学助教授）

三木直大（広島大学助教授）

「『人間の悲哀』—詩人・林亨泰の喪失と再生」

コメンテーター 下村作次郎（天理大学教授）

丸川哲史（一橋大学大学院）

「50年代の邱永漢—『濁水溪』をめぐる」

コメンテーター 川村湊（文芸評論家）

《歴史・思想》

呉豪人（立命館大学講師）

「『闇の奥』：台湾法史の中の岡松参太郎像」

コメンテーター 春山明哲（国会図書館職員）

李季樺（東京大学大学院）「19世紀末から20世紀

中葉にかけての台湾における迷信観」

コメンテーター 松金公正（台湾宗教史研究者）

竹中信子（台湾女性史研究者）

「アジア太平洋戦争下の台湾の女性」

コメンテーター 林郁（作家）  
三橋広夫（千葉市立高洲第一中学校教諭）  
「台湾に向き合って学ぶ近現代史」  
コメンテーター 松尾章一（歴史学者）  
○シンポジウム  
台湾側 パネリスト  
座長 黄英哲（愛知大学助教授）  
許介麟（台湾大学法学院院長）「アジアのルネサ  
ス—国家主権の枠組みを超えて」  
鄭清文（作家・前台湾ペンクラブ会長）  
「台湾文学のあり方」  
林水福（輔仁大学外国語学院院長）  
「日本文学史において不可欠な一章」  
張良澤（共立女子大学教授）  
「中国人から見た日本統治下の台湾」  
日本側 パネリスト  
座長 西田勝（文芸評論家）  
大江志乃夫（歴史学者）「日本の台湾征服戦争」  
山田博光（帝塚山学院大学教授）  
「日本近代文学における台湾漂流記：中村地平『長耳国漂流記』を中心に」  
藤井省三（東京大学教授）  
「帝国主義支配下台湾文学のダイナミズム」  
鈴木佑司（国際政治学者）  
「日本・台湾そしてアジア太平洋地域—権威主義  
支配と国家主導型開発に代わるもの」

## 「台湾の土地制度と農業・環境問題」 学術シンポジウム参加記

圖左篤樹

2000年1月8日に台湾・東海大学社会科学学院において「台湾の土地制度と農業・環境問題」学術シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、日本・財団法人交流協会と中華民国教育部の協力のもと、台湾史研究会と東海大学法律学系が合同で開催したものであった。海外でのシンポジウム開催であったにもかかわらず、日本からは台湾人留学生を含め11人の会員が参加し、現地会員5名を含め計16名の参加となった。また、台湾側からの出席者28名を合計すると計44名の参加者があり、非常に盛会で充実したなシンポジウムであった。

午前10時に開会し、石田浩代表の開会の挨拶のあと、第1分科会が開始された。第1分科会のテーマは戦前・戦後の台湾の土地制度の変遷であり、松田吉郎報告では戦前の米・甘蔗の生産の分析を通して、戦前の土地制度の展開について考察がなされ、温豊文報告では戦後の土地立法の変遷を三期に時期区分し、各時期の土地立法の特徴とその内容について報告がなされた。評論者の張勝彦氏からは戦前と戦後の土地政策に関連して、日本植民地統治政策および戦後の国民党の政策の意義に関する問題提起がなされた。またフロアーからは、米・甘蔗の以外に茶・バナナ・樟脳等の商品作物と土地制度との関連性、戦後の土地立法政策と台湾農業の発展との関連性について、多くの質問がなされ、活発な討論が展開された。

次に、第2分科会のテーマは戦後の経済成長と農業の発展であり、石田浩報告では戦後の台湾農業と経済成長との関連について、北波道子報告では農村の工業化と輸出志向工業化について報告が行われ、石田報告では農業の発展を工業化の裏面史として捉え、台湾農業が経済成長に果たした役割についての考察がなされた。評論者の鶴嶋雪嶺氏からは、農業の果たした役割だけでなく、農業機械の普及による労働の省力化や化学肥料の普及による農業生産力といった工業の発展が農業に果たした役割についても検討する必要があるのではという問題提起があった。また、北波報告に対して、フロアーから農村工業に関連して、農村工業の生産・分業の形態や輸出指向工業化における農村工業の意義といった、多岐にわたる質問が盛んに出、非常に興味ある議論が展開された。

そして、第3分科会のテーマは環境問題であり、游振銘報告は現在の農業と環境めぐる台湾の課題および問題、陳禮俊報告は世界の環境保全の潮流と台湾における環境保全・環境政策の現状について報告した。評論者の萩原豪氏やフロアーからは、游報告に対しては今後の台湾農業の発展と環境保全—持続的な発展（sustainable development）—に関して、陳報告に対しては台湾における環境に対する意識の高まりと現実との乖離に関する問題提起・質問が数多くされた。第3分科会では、環境という古くて新しい問題を取り扱っており、第1分科会・第2分科会のテーマと密接に関連するものであり、今回のシンポジウムの総括ともいえるものであった。

こうして、様々な議題の討論が進行し、「台湾の土地制度と農業・環境問題」学術シンポジウムは盛会をもって終了を迎えた。

最後に、今回の学術シンポジウムに参加した以外の活動として、1月6日に中央研究院李遠哲院長を訪問し、台湾史研究会会員、関西大学教職員・学生、その他大勢の方々からカンパして頂いた台湾大地震義援金を李遠哲院長に渡したと、1月9日にシンポジウム参加者12名で台湾大地震の被災地へ向かい、被災地の現状を視察したことを最後に付け加えさせていただく。

（関西大学大学院博士課程）

## 「台湾における台湾研究」通信(3)

### 「台湾法律史学会」の創立とその軌跡

宮畑加奈子

歴史的趨勢と偶然の所産、台湾法律史学会はその結合によって生まれた。1997年3月10日、景雲街某教授宅での宴もたけなわとなったころ、誰が言い出すともなく台湾法律史にかんする知識の心もとなさに話が及び、この方面での研究を推進する学会設立が提案されたのを直接の契機とする。その後準備委員会による討議を経て同年10月25日に創立大会が開催されるにいたった。

「台湾法律史の研究推進を主旨」とするこの会は理事長の黄宗棠教授（台湾大学法律学系）、秘書長の王泰升副教授（台湾大学法律学系）を中心に運営され、毎年春季と秋季に学術検討会や座談会を開催している。会員は台湾法律史に興味をもつ「有志研究者」とされ、特に学識者に限られたものではない。なお現在の会員数は五十名ほどとなっている。参考までにこれまでの検討会・座談会のテーマを列挙してみよう。

「台湾法律史研究の展望」、「台湾法律史の研究方法与資料蒐集」、「台湾地方制度」、「法律史学と法社会学の交錯」、「台湾における日本時代の祭祀公業」、「台湾法律史研究史料紹介」、「二二八事件の法律史的意義」、「台湾近代における司法の変遷」、「日本時代の台湾における立法権の運用情況」（原題はすべて中国語）

以上にみられるように年二回の学術検討会・座談会では毎回趣向がこらされ、公法・民法・刑法・法社会学・法哲学・台湾史・日本法制史など各分野の研究者を招いて活発な議論が行われている。加えて1998年から1999年にかけて「台湾高等法院旧蔵法律資料図書目録」の作成を推進するなど、関係資料の収集・整理にも積極的に取り組んでいる。また近々「台湾法律史叢書」第一巻（学林文化事業有限公司）の発行も予定されており、これまでの軌跡を垣間見ることができる。

発足から間もない台湾法律史学会の活動は緒についたばかりにすぎないが、以後は台湾で法律を学ぶ人々の参与をさらに促し、研究の質を高めることが目標とされる。人材の育成も重視されており、新進の研究者の参加が常に意識されている。「法律史に対する知識の欠如」を痛感することから始まったこの会ながら、その歩は着実に進められている。

（以上、王泰升副教授提供の資料をもとに作成）

（台湾大学法律研究所博士課程）

## 台湾教育史研究会簡介

### 許佩賢

台湾教育史研究会は、中央研究院台湾史研究所籌備処の周婉窈教授が、以下のような状況に鑑みて研究会組織を思い立ったことに始まる。それは第一に、台湾教育史研究者や大学院生で台湾教育史を専門としようとする者が日に日に増加しているという状況である。第二は、周教授がその前年に半年間東京に滞在した際に、日本で学会や研究会が盛んに組織されていることを知り、台湾でもそのような場をもてないかと考えたことである。

帰国後、周教授は、自らの専攻する教育史の研究者同士の交流を深めるために台湾教育史研究会の組織を提起し、台湾師範大学歴史系の呉文星教授、淡江大学歴史系蔡錦堂教授、そして筆者と話し合いの場をもった。そして、参加者一同、周教授の意図に賛成し、研究会のあり方についても議論おこない、呉文星教授を召集人とし、事務局を師範大学歴史系に設け、1998年10月に成立総会を催した。

研究会を組織した当初、主催者たちには特に「野心」は無かった。ただ教育史に関する議論をおこない、資料などにかんする情報を交換する場を提供できればよく、もし可能であればこの研究会のもつ一種の凝集力を利用して史料集や工具書、研究入門の編纂などといった研究上のインフラ作りがといったこともできればよいと考えていた。現実の台湾の研究状況を見れば、大部分の研究者は、教育・研究・行政に追われていたので、もし研究会の組織当初から雄大な野心を抱いてしまえば、直ちに水泡に帰することは明らかであった。

こうした状況に鑑み、十分に余裕をもった会則と活動原則をまとめた。例会は、2ヶ月に1度開くこととし、毎回二本の発表を準備する。また、ニュースレターを発行し、例会の内容や各種活動を掲載する。入会規則や各種活動に関する参加資格なども特に定めず、ただ興味があれば参加できるようにした。

現在、会員数は約50名である。約半数は各大学の大学院生である。彼等の専攻や出身国も多様で、専攻では歴史学のみならず、体育学や音楽学、人類学に所属する院生が集い、他方国別で見ると二本・韓国・ベルギー・ロシアなど各国からの留学生も含まれている。このような異なる背景をもつ者どうしの研究会での議論は大変活発である。

研究会は前述のように2ヶ月に1度開かれている。出席者はおよそ20名程度で、議論も多様化してきている。ニュースレターは既に7号まで発行している。ここでは、例会の内容のほかに、新書紹介、図書館・資料館情報など、会員に有用な情報を掲載している。

このほか、本研究会では設立当初から日本時代の公学校の教科書を復刻する計画を策定している。第1段階として五期分の国語読本を復刻することを計画しており、国家図書館台湾分館・国立台北師範大学および南天書局など各方面と協商をおこなってきた。今のところ作業はやや遅れ気味であるが、今年中には具体的な成果を出せるよう努力している。（台湾大学歴史研究所/川島真訳）

## 台湾における学会・シンポジウム消息

日時	テーマ	主催単位
5/5-6	回顧老台湾、展望新故郷—台湾社会文化変遷学術研討会	台湾師範大学歴史系・台湾省文献委員会主辦
5/6-7	第二屆花蓮文学研討会	文建会主辦・花蓮県文化局承辦
5/27-28	吳濁作品國際研討会	新竹県政府主辦・新竹県立文化中心承辦
5/28	近代化对民族固有習慣的衝擊	台湾法律史学会・台湾法学会主辦
6/7-9	台湾文献史料整理成果	台湾省文献委員

	研討会	会主辦・日本交流協会協辦
8/3-7	国家認同研討会	台湾歴史学会
9/6-8	被植民国家之都市與建築研討会	中央研究院台湾研究所籌備処
10/6-7	東台湾郷土文化學術研討会	文建会中部辦公室主辦・台東県立文化中心承辦・台東師範学院社会科教育学系・東台湾研究会協辦
10/15-16	「宜蘭研究」第四屆學術研討会—眺望海洋的蘭陽平原	宜蘭県政府主辦・宜蘭県史館承辦
10/23-25	2000年平埔研究國際學術研討会	中央研究院民族学研究所・台湾研究所籌備処
10/26-27	近代早期東南亜海洋史和台湾島史：慶祝曹永和院士八十大寿國際學術研討会	文建会主辦・中央研究院社会科研究所・台湾史研究所籌備処承辦
11/3-4	台湾與大陸的關係學術討論会	国史館
11/4	王昶雄文学会議	真理大学台湾文学系
12/1	田健次郎日記研討会	中央研究院台湾史研究所籌備処

(本表作成にあたって、台湾史研究所籌備処の鍾淑敏・詹素娟・林玉茹各教授、台北師範大学何義麟教授、清華大学大学院柳書琴・陳建忠兩氏、中央研究院歴史語言研究所邱澎生教授、台湾大学法律研究所劉恆女文氏に情報を提供していただき、取りまとめには台湾大学歴史研究所の許佩賢氏の御協力を得た。記して謝意を表したい)

## 台湾図書館・档案馆消息

### (1) 旧総督府図書館所蔵日本語図書の開

中央研究院台湾史研究所籌備処では、2000年1月3日から、かつての総督府図書館の収蔵していた日本語図書の公開を開始した。このコレクションは、従来国家図書館台湾分館の新店書庫に置かれており、それを分館と台史所で整理し、中央研究院に運び込んだ。周知のとおり、台史所のスペースには限界があるので、史語所の傅斯年図書館に置かれ、閲覧に供されている。しかし、目録などは現在編纂中であり、所蔵状況を調べるには総督府図書館時代に製作されたカードにて検索することができる。利用細則は以下の通り。

#### <流通規定>

1 限館内閲覧、当日還書

2 借還書時間：提書時間、10時、14時

閲覧時間：10時—16時20分

3 特定閲覧区・傅斯年図書館一樓閲覧区

4 借書冊数：一次借書以五冊為限。

#### <影印規定>

1 書籍可申請影印、由專人代為影印、不論紙張大小、一張3元。影印資料一星期後取件。但書籍若破損嚴重、地圖、照片等圖像資料及善本不得影印。

2 影印分量不得超過該冊圖書の二分之一。

(許佩賢氏情報提供)

(2) そのほか：次期国史館館長に張炎憲氏内定。

## 日本台湾学会活動状況

## I 理事会（山崎代理）

### 第一期常任理事会第5回会議議事録

日時・場所：2000年1月8日、東大駒場キャンパス8号館306号室

出席：常任理事（若林正文、藤井省三、張士陽、佐藤幸人、松田康博）、理事（駒込武）、幹事（川上桃子）

司会：若林 記録：山崎直也

・第4回常任理事会会議議事録確認、問題なし。

<報告事項>

#### 1. 理事長・事務局報告

会費納入状況確認。未納者が全会員の三割弱。

#### 2. 各業務担当理事報告

##### （1）会計関係

会費納入率向上のため、学術大会での納入も模索。

##### （2）ニュースレター関係・文献データベース

川島理事がメールにて報告。データベースについては、数千件の入力終了。今後ホームページに掲載することを検討。予算については人件費として既に20万円強を使用。ニュースレターは、地震特集。

##### （3）ホームページ関係

ホームページを、文部省学術情報センターのサーバ（無料）に置くことも検討。また、学術情報センターのサーバにはデータベースも置けるとのこと。データベースについては、日台交流センターか学情のサーバを利用することも検討。

##### （4）定例研究会関係

12月5日に北海道大学にて開催。北大のグローバルゼーション研究会との共同開催。若林理事と塚本理事が参加。また、次回の定例研究会は4月22日の理事会終了後に修論報告会を行う予定。

##### （5）会誌関係：特になし。

#### 3. その他：特になし

<審議事項>

##### （1）新規入会申請

新規会員2名の入会を承認。現有会員253名。

##### （2）第2回大会開催要項（案）について（別紙参照）各分科会での報告者の状況、記念講演者について検討、確認。

（3）第3回学術大会開催方式について（塚本常任理事作成別紙参照）：分科会企画と自由論題報告の募集は、企画委員長である塚本常任理事が作成した「第三回学術大会分科会企画・自由論題報告募集のお知らせ（企画委員長案）」及び、それぞれの申込書をたたき台にして検討。

##### （4）第3回大会企画委員内定

企画委員については、塚本元（委員長、政治）、劉進慶（経済）、張士陽（歴史）。文学関係者についても今後検討。

（5）規約改正について（松田常任理事作成別紙参照）理事・常任理事・幹事の人数（規約第8条）、選挙規定の改正（第2～4条）、副理事長について検討。改正案を常任理事会案として、総会提出。

##### （6）九二一大震災募金関連

募金関連口座開設、また、第2回学術大会の際にも募金箱を設置する。呼びかけ文は提案者である藤井理事が原案作成。募金目的＝現地の家族が被災して学費の納入などが困難になった留学生支援を主とする。そのほか大卒を審議。また、寄付者の情報は、基本的に公表。

##### （7）次回常任理事会日程

##### （8）その他

第2回学術大会の総会の冒頭で大地震の被災者に対して黙祷を捧げる。『日本台湾学会会報』について、第3号から、書評を掲載。

### 第一期常任理事会第6回会議議事録

日時・場所：2000年3月4日／東大駒場キャンパス8号館306号室

出席：常任理事（若林正文、藤井省三、張士陽、塚本元、佐藤幸人）、幹事（浅野豊美、川上桃子）、委任状（松田康博）

司会：若林 記録 山崎直也

・第5回常任理事会会議議事録確認、問題なし。

<報告事項>

#### 1. 理事長・事務局報告

ニュースレターの第3号が発行された/現在、会費の納入状況リスト作成中。第2回学術大会の時に受付で会費の払込ができる/本格的な会員名簿作成中。

#### 2. 各業務担当理事報告

##### （1）会計関係：特に問題なし

##### （2）ニュースレター関係・文献データベース関係：特になし

##### （3）ホームページ関係：ウェブマスターの身分

変更を視野に入れた管理体制模索。

##### （4）定例研究会関係：議題へ。

- (5)会誌関係：連休前の発行を目指す。英語の目次掲載（第1号からの改善点）/収録する論文は、学術大会報告中心/次号からは書評・研究動向のレビュー等の掲載を検討。

<審議事項>

1. 新規入会申請：新規会員入会承認。現有会員256名。
2. 第二回大会開催要項（案）について（別紙）政治・経済分科会（佐藤常任理事担当）/歴史・社会分科会/文化・文学分科会/教育分科会の各分野から進捗状況について報告。
3. 第三回大会開催方式について→別紙参照「第三回学術大会分科会企画・自由論題報告募集のお知らせ」（常任理事会案＝塚本元常任理事作成）を確認。河原功会員（文学）と劉進慶会員（経済）が企画委員承諾。
4. 予算・決算について張士陽財務担当理事作成案検討。4月1日の常任理事会で再検討。
5. 規約改正について→別紙参照4月22日第一期理事会第2回会議に提出。
6. 九二一大震災募金について張士陽財務担当が震災募金専用の口座を本郷郵便局に既に開設。第2回学術大会のプログラムに呼びかけ文と払込用紙を同封。学術大会の会場に募金箱設置。募金の支給方法は、額に応じて台北駐日経済文化代表処文化組と相談。また藤井理事より、この機会に学会として留学生の恒常的な研究支援体制を確立すべきとの提案がなされた。だが、他方でこうしたファンド運営のあり方について不安が残るという指摘があり、議論の末、今回の呼びかけ文を柔軟に解釈することも視野に入れ、募金総額の見てから恒常的な支援体制に転換するを理事会や総会においてあらためて提案することも可能ということになった。
7. 第一期理事会第2回会議（4.22）議案：別紙参照。若林理事作成の議案（案）検討。
8. 4月定例研究会＝2000年度修論発表会塚本元常任理事より。4月の定例研究会は選挙直後というタイミングもあり、また理事会の同時開催の関係で多数の出席者が見込まれるため、「2000年総統選挙をめぐって」と題した座談会を開催。修論発表会は5月の平日の夜に行うことにする。日程は再度検討。
9. 次回日程及び議題4月1日（土）16:30～、駒場東大8号306号室にて開催。
10. その他：特になし

**第一期常任理事会第7回会議議事録**

日時・場所：2000年4月1日、東大駒場キャンパス8号館306号室

出席：常任理事（若林正文、張士陽、佐藤幸人）、幹事（なし）、委任状（藤井省三、塚本元、松田康博）

司会：若林 記録：山崎直也

・第6回常任理事会会議議事録確認、問題なし。

<報告事項>

1. 理事長・事務局報告：特になし
2. 各業務担当理事報告
  - (1) 会計関係：審議事項4参照
  - (2) ニュースレター関係・文献データベース関係：特になし
  - (3) ホームページ関係：特になし

- (4) 定例研究会関係：特になし
- (5) 会誌関係：佐藤理事より、掲載論文の調整について報告。

3. その他：特になし

<審議事項>

1. 新規入会申請：新規会員3名承認。現有会員259名。
2. 第二回大会開催要項（案）について：別紙参照。「日本台湾学会第二回学術大会プログラム案」の内容確認。未確定部分は、各担当が確認作業続行。
3. 交流協会助成申請について：第二回学術大会の開催に際して、財団法人交流協会に助成金の申請検討中。
4. 予算・決算について（→別紙参照）：張士陽常任理事作成の「日本台湾学会1999年度決算案」・「日本台湾学会2000年度予算案」・「日本台湾学会第二回学術大会予算案」・「日本台湾学会第一回学術大会決算」を検討、修正。
5. 第一期常任理事会第二回会議（4.22）議案について（→別紙参照）：若林常任理事作成案検討。問題なし。選挙管理委員依頼。幹事増補も検討。
6. 九二一大震災募金について
7. 大会準備作業について（→別紙参照）：第二回学術大会の連絡表完成。
8. 次回日程及び議題：常任理事及び在京の幹事は学術大会の前日（6月2日）午後2時に山上会館ロビーに集合。
9. その他：特になし。

第一期理事会第2回会議議事録

日時・場所：2000年4月22日、東京大学駒場キャンパス8号館306室

出席：理事（石田浩、佐藤幸人、塚本元、張士陽、藤井省三、若林正文）、幹事（沼崎一郎、川上桃子）、委任状（川島真、黄英哲、駒込武、松田康博）

司会：若林正文 書記：山崎直也

<報告事項>

1. 事務局報告：現有会員本日承認（1名）をいれて、260名。）
2. 学術大会準備：審議事項（3）・（4）へ
3. ホームページ・ニュースレター：ニュースレターは、学術大会までに次号を出すべく川島理事が準備を進めている。内容的には、文学者・王昶雄氏の追悼特集が中心。
4. 会誌編集：4月30日には印刷終了。
5. 定例研究会（→別紙参照）：「日本台湾学会定例研究会活動報告（1999年4月～2000年3月）」（塚本理事作成）に沿って昨年度の活動概況及び今年度の活動予定を確認。塚本理事より、今年度は、6～7回は開催、テーマ的にも政治だけでなく、歴史・経済・文化人類学などの報告も増やす旨、説明がなされた。また、地方で開催される研究会については、昨年度の第4回定例研究会同様、日本台湾学会との共催という形で開催することを模索。
6. 戦後日本台湾研究関連文献データベース作成事業：すでに数千件のデータが北大の川島理事のコンピュータに入力済。しかし、担当者の就職や異動などの関係で、その後の作業はまだ進んでいない。入力されたデータの管理・運用については、今後の課題。若林理事より、科学研究費補助金にデータベース科研

というものがあるので、それを申請することも考えられるという発言がなされた。

#### 7. その他：特になし

#### <審議事項>

1. 1999年度決算報告（案）（→別紙参照）：張理事作成「日本台湾学会1999年度決算案」検討。
2. 2000年度予算案（→別紙参照）：張理事作成の「日本台湾学会2000年度予算案」及び「日本台湾学会第二回学術大会予算案」検討。
3. 第二回学術大会について（→別紙参照）：「日本台湾学会第二回学術大会プログラム（案）」を検討。各分科会の会場の部屋割り検討。また、各分科会の内容調整。
4. 第三回学術大会開催方式について（→別紙参照）：「第三回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集お知らせ（常任理事会案）」を検討。
5. 会則改正について（→別紙参照）：「日本台湾学会規約改正案（常任理事会案）」を検討。
6. 「日本台湾学会賞」規定案について（→別紙参照）：「日本台湾学会賞規定（案）」を検討。
7. 九二一台湾地震に影響を受けた留学生支援募金について（→別紙参照）：「台湾大地震被災家族を持つ台湾人留学生支援のための募金のお願い」（藤井理事作成）を確認。藤井理事より、今回の呼びかけの主旨が説明された。
8. 選挙管理委員会について：具体的人選がおこなわれた。
9. 幹事の増補について：林成蔚会員を幹事として推薦することを理事会として承認。
10. その他：正会員1名の入会を承認。（現有会員260名）/学術大会での総会は、学会規約に照らして臨時会員総会とする。/第3回学術大会の開催地は、東大の山上会館の他に、愛知大学という可能性も模索（黄英哲理事提案）。

## II 定例研究会（塚本理事）

### <修士論文報告会> 第一回

日時：2000年6月7日（水）、18時30分

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス・ボアソナード  
タワー（新棟）13階E会議室

林欣儀氏（大阪大学大学院博士課程日本語学社会言語専攻）「台湾における言語使用・言語切り替え—テレビの政治討論番組を通じて—」

### 第二回

日時：2000年6月24日（土）、15時30分

場所：東京大学教養学部（駒場キャンパス）  
8号館306号室

李銘忠氏（埼玉大学大学院文化科学研究科博士課程）「日本統治下台湾文化協会の活動とその遺産—台湾人のアイデンティティ形成を探る—作業として—」

大浜郁子氏（法政大学大学院人文科学研究科博士課程日本史学専攻）「植民地教育政策における「同化」への模索—台湾公学校の設置をめぐる—」

## III 文献目録（川島理事）

戦後日本台湾研究文献目録を作成しています。これは、会員諸氏からの御協力の下に、戦後日本における台湾研究関連文献目録を作成し、電子媒体の上で公開し、今後の台湾研究のリソースとすることを目的としています。昨年の大会で承認をうけてから、既に数千の文献を打ちこみ、現在のところウェブ上での公開を試みているところです。

ただ、各会員にお願いしております業績一覧の送付につきましては、全会員の1割も達成できていないのが実状です。是非ともメールなどの電子情報で、[taiwan@juris.hokudai.ac.jp](mailto:taiwan@juris.hokudai.ac.jp)まで御送付ください。宜しく願いいたします。

## 第三回学術大会文化会企画・自由論 題報告募集のお知らせ

第三回学術大会企画委員長 塚本元

日本台湾学会では第三回学術大会から分科会企

画と自由論題報告を公募によって決定することにいたしました。つきましては、分科会企画及び自由論題報告の募集を行います。多数の会員の方々応募していただけますようお願い申し上げます。特に若い会員諸君の応募を歓迎いたします。

なお、本件に関します要綱・申込書は、会員の方々には学会事務局よりすでに郵送済みです。また、学会ホームページにも掲載済みですのでご参照ください。

#### 企画委員長連絡先

102-0071 東京都千代田区富士見2-17-1

法政大学法学部

e-mail [tsukamo@i.hosei.ac.jp](mailto:tsukamo@i.hosei.ac.jp)

## 編集後記

本号では、台湾文学研究をおこなっている会員の御協力で王昶雄特集を組むことができました。三月中に原稿を提出していただいた会員には編集が遅れ申し訳なく思っています。王先生には改めて黙祷をささげたいと思います。また、会員に有益な情報を掲載するという意図から、台湾における学会情報を台湾の若手研究者の協力でまとめ掲載することができました。学会・シンポジウム参加記や研究会情報なども、今後継続していきたいです。また、図書館や档案馆情報も僅かですが掲載しました。これからこの方面の情報もアップしていきたいと考えています。

さて、平成11年度は作業が遅れ、3号しか発行できませんでした。12年度は遅れを取り戻すべく三回発行する予定であります。会員諸氏の御協力をお願いいたします。

ところで、今回の編集作業は北京にておこなわれました。編集子が北京に来てから二月が経とうとしています。中国から見た台湾問題観や、あるいは「老百姓」の台湾観に日常的に接すると、台湾にいたときは違った視点で中国の台湾政策を見ることができるようになるのではないかと考えています。しかし、政治都市北京では、台湾に住んでいたことがあるというだけで、または台湾訛の「南方国語」を話すだけで相当警戒されるのも事実です。このような状況に接すると、北京政府が自らの作った「絶対統一」一枚岩世論に縛られて、柔軟な政策がとれなくなるのではないとも感じます。一部の官僚や研究者は比較的柔軟な考えを有していますが、一般的には台湾問題は一種の「踏絵」です。編集子が赴任してまもなく担当した北京大学の授業でも、台湾での民進党勝利のため（とされている）、「政治多元化」論に関する緘口令が北京大学・社会科学院に出されるという引締があり、中国語での授業を禁止され、横に通訳兼監視がつくということもありました。

ただ、中華民国史研究者である編集子にとっては、台湾が国内における「中華民国」「中国」的符号を殆ど廃除し、これらを两岸関係の上にもみ置こうとしているように見え、「もう誰も止められない」にしても、やや時期尚早ではないかとの危惧を感じることもあります。中国は、台湾における「中国」を探し出し、それが1/100でも100として国内世論に訴えてきたという経緯があります。その1さえなくなりつつある状況に接した現在の中国の焦りは、衝突に結びつくのか、それとも「中国」の再定義に向かうのか。「中華民国」という台湾にとっての一つのオゾン層が無くなるかもしれない今、紫外線が地表に降りかかることになるのではないかと個人的には思います。20世紀の東アジアにおける「中華民国」という装置の意味を歴史的に問い直す時期に来ているのかも知れません。

(ニューズレター担当理事：川島真)

## 台湾大地震被災家族を持つ台湾人留学生支援のための募金のお願い

昨年九月に台湾は大地震に襲われ多大の被害を受けました。しかし台湾の国民の不屈なる精神と懸命なる努力とにより、今日までに復興が急速に着実に進んで参りました。また諸外国からも多くの救援の手が差し伸べられ、日本でも国民的な支援が巻き起こりました。

日本台湾学会は地震直後に台湾の学術界に宛て、哀悼と慰問の意を表すとともに「微力ながら皆様の奮闘を声援・支援したいと心から願っております」という声明を発表いたしました。その後、ボランティアとして被災現地に飛んだ方や、個別に台北経済文化代表処等に義援金を送った方も多くおられることと思います。ただし日本台湾学会としての具体的な募金活動等は、台湾学術界関係の状況を把握してからという判断のもと、現在まで保留して参りました。

台湾での被災者は幸いにも台湾の政府・民間、諸外国からの援助を受け、着実な立ち直りを見せているようですが、日本留学中の台湾人学生の中には、家族が被災したため仕送り等に影響が出て留学生活に困難を覚えている諸君もおられます。台北駐日経済文化代表処文化組の調査によりますと、日本留学生のうち15名の家族が被害を受けており、そのうち自宅全壊が6名、半壊が4名、損壊が5名であります。その氏名、留学先大学名一覧の資料は文化組より提供していただきました。文化組によりますと、これら罹災留学生に対しては、国内の実家がすでに「災民補助」を受けているため、代表処としては補助を与える等の対応はしていない、とのことでした。

1998年5月の日本台湾学会創立大会で「交流協会奨学金留学生制度に対する奨学金支給期間の延長に関する要望書」を決議しましたように、交流協会奨学金を受けた国費留学生でも二年経過後は9割近くが奨学金を打ち切れ私費留学生に転じています。家族が被災した留学生の中には私費留学生も多く、勉学の継続に苦勞している諸君も少なくなろうかと思われまます。

そこで日本台湾学会として留学生支援の募金活動を行ってはいかがでしょうか。当面は大地震被災家族を持ち留学生活に困難を来している台湾人学生へのお見舞金を送ることを目標とします。主旨にご賛同下さる会員は、寄付金を一口1000円、できれば5口、10口、20口...の寄付をお願いいたしたく、ご案内申し上げます。送金は同封の郵便振替払込書によりお近くの郵便局よりお振り込み下さい。また会員

以外の方のご寄付も歓迎いたしますが、その節は振替払込書の通信欄に非会員である旨、お書き添え下さい。  
なお勝手ながら事務上の都合により同封振替用紙による学会費納入はご遠慮下さるようお願いいたします。  
末筆ながらみなさまの御文安を祈ります。

不一

2000年3月10日

日本台湾学会理事長 若林正文

日本台湾学会ニュースレター 第4号

発行 日本台湾学会（代表 若林正文）

印刷 北大印刷

発行年月 2000年5月

日本台湾学会事務局

〒153 - 8902東京都目黒区駒場3 - 8 - 1

東京大学教養学部第8号館若林研究室気付

T & F 03 - 5454 - 6416

E-Mail:JATS@ask.c.u-tokyo.ac.jp

<http://ask.c.u-tokyo.ac.jp/~taiwan>

ニュースレター発行事務局

〒060 - 0809北海道札幌市北区北9条西7丁目

北海道大学法学部川島研究室気付

T & F 011 - 706 - 3132

E-Mail:taiwan@juris.hokudai.ac.jp

第二回学術大会は、2000年6月3日（土）東京大学山上会館にて開催します。